

本書は、医療法人社団悠翔会理事長の佐々木淳医師が主催して行われている研修会「在宅医療カレッジ」のこれまでの講義のエッセンスを「地域共生社会を支える多職種の学び」との副題でまとめたものである。報道キャスター、記者として各方面で活躍し、自らの両親の介護に向き合った経験を持つ町亜聖さんを学長に迎えたことからわかるように、利用者（当事者）本位を基本理念において、最前線で活躍中の多彩な教授陣からのオリジナリティのある実践に裏打ちされた濃い内容の講義がコンパクトにまとめられており、あっという間に読了した。

第Ⅰ部「認知症ケアの学び」、第Ⅱ部「高齢者ケアの学び」、第Ⅲ部「地域共生社会の学び」の3部構成で21の講義が編集されている。それぞれを丁寧に紹介できないのが残念だが、ここでは各講義の語りから印象的なフレーズを引用し、順次つなぐ形で内容をお伝えしたい。

第Ⅰ部では、「認知症は『おしまい』か」「介護職は認知症のお年寄りがご近所の公園の掃除をするのを支援するというように地域のデザイナーとして働くことができるのではないか」「介護する本人が楽しいからやり続ける」「『快』の時間を増やす」「一番の特効薬は楽しく笑い合うこと」「おまえが忘れても、俺たちが覚えているから」といった流れで、認知症ケアの取り組みの最前線像が伝わってくる。

第Ⅱ部では、「薬は、できれば1日1回（だけということ）をお勧めする」「リハビリは、五体満足に近づくことではない、人生の成功者になること」「嚥下障害の人でもその人が本当に食べたいものだとむせなかった」「リハビリテーション栄養とは何か」「最期まで口から食べられる街をめざす」といった流れ

で、最前線の各専門職の気概が生き生きと描かれている。

第Ⅲ部では、「スピリチュアルケアの1つは、自分の外の大きなものとの出会いの支援」「独居の方を自宅で看取るには3つの条件がある」「病院がなくても幸せに暮らせる」「ケア者の本当の力とは、たとえ力になれなくても逃げないで最期まで支える力」「人生で自分が生きられる期間を切られてしまったとき（思うことは）、仲間との夢を実現する（しようとする）ことが、自分が生きている現実中最期まできちんと向き合うということではないかということ」という流れで、共生社会の本質に迫る話がさまざまな視点から展開されている。そして、カレッジの授業が続けられている最中に、看板教授といってよい二人の医師（西村元一、村上智彦両氏）が60歳を間近に控えて立て続けにがんて亡くなるという大変悲しいことが起こった。そこで、今回書籍化された内容の締めくくりのような形で、その親しい友人たちによる講義が行われ、「つないでいてほしい」「公として機能していてほしい」という二人の重い遺言が伝えられている。

今、国の政策は超高齢社会を展望し「治し支える医療」への大転換をめざしている。本書は、まさに「病気を治す」という医療の定義に「支える」という言葉が加えられた意味を追求し、それを築きあげるという壮大な取り組みが始まっているということに雄弁に語る物語でもある。専門職にとどまらず、多くの人にそのことを味わいながら読んでいただけることを願っている。

（A5 頁264 2018年 定価2,000円＋税[ISBN978-4-260-03823-2] 医学書院刊）